

# 備陽史探訪

第41号  
発行  
備陽史探訪の会  
福山市多治米町5-19-8  
TEL(0849)53-6157

## 湖東地方一泊二日の旅のお誘い

神谷 和孝

もう恒例になってしまったと言っても良い本会主催の一泊二日の旅行。出来るだけ会員の希望にそってと計画をたて、毎回多勢の方の参加と御協力を得て今日まで継続してこれ来ました。ふりかえってみて、どの旅行も素晴らしかったと思っています。今年は琵琶湖の東岸とわざわざ言わなくても、湖東地方の呼び名で知られている場所を中心に巡る計画をたて、すでに役員会でも承認され、小林良子さん、後藤匡史さんと神谷が担当と決まり、三人で相談しながら交通・宿の手配も総て済ませ、十月九日・十日(連休)の実施を待つものの段階です。

個性のそれぞれ異なる三人が組み立てる旅行ですので、どんな旅行が出来るか、乞う御期待を!

実は、一昨年だけで三回、私はこの地を巡り、巡る都度、この地の魅力にとりつかれたみたいになって、是非、会員の皆様にも、その素晴らしさを知っていただきたいと、旅行の候補地に挙げてきて、やっと今回、実現したと言うわけです。

前おきが長くなりましたので、この辺で湖東地方の紹介をさせていただきますように。

この地域は丁度、日本の真中にあり、東は東海道、中仙道、北陸方面。西は京都、奈良に接し、大陸からも海を上げれば近いし、琵琶湖の水運も便利がよいし、地理的に恵まれていて太古の昔より常に歴史の舞台となってきたところです。

戦国時代に信長や秀吉が天下をとるなら、まずこの地の掌握をしなればと、この地に安土城や長浜城を築いた理由も、この地を巡る回数がふえるに従って理解出来るようになります。

現在でも、日本の交通のメインと

なっているJR東海道線や新幹線がこの地を走っていることを考えても、この地の重要さが理解していただけたらと思います。

さて今回の旅行のコースに従って主な見学地を述べておきましょう。

新幹線で京都に着き、そこからバスに乗りかえて、額田王の句碑のある蒲生野、万葉の丘を経て石塔寺を最初に訪れます。石塔寺と名があるだけに、石塔の数の多さに驚ろかされます。百段近い階段を昇り切ると

これらのお寺の隆盛の時代を偲んで下さい。この後、愈々今回の旅行のメインである安土城を訪れます。信長によって築造された幻の名城。築造されて三年後には火に包まれて、その姿を消してしまい、今は残された石垣から当時の安土城を偲ぶしか術がありませんが、この石垣に登って眼下に琵琶湖をのぞみながら信長の胸中を偲ぶのも一興ではありませんか。

目前に一目三万と言われる石塔が眼に飛びこんできます。高さ八メートルの中国六朝の様式を伝え、本国でも最古最大と言われる石の宝塔を中心に数万の石塔が存在する風景は圧巻です。石塔寺を経て秦荘町に参ります。この地は昔から近江上布と言

その夜は近江八幡に宿をとります。この町(市)は古い建物も多く、散策するのには素晴らしいところです。翌日は最初に近江商人のことを知るために五箇荘町の歴史民俗資料館を訪れてみましょう。鎌倉時代に端を発し、明治時代には全国に商売をひろめた近江商人のたくましさ

を今に伝え、布が出来上るまでの工程を人々に知らせて呉れる役割を目的で作られた金剛苑で昼食をと

紙面が少なくなつたので大急ぎで残りの見学場所を説明しましょう。五箇荘町から西岸の比叡山のおもとの坂本へまわり、ここで日吉神社、東照宮(日光の東照宮のモデル)等を見学し、比叡山の延暦寺を経て京都に着き、一路福山へ帰るとい

往時のおもかげを残す西明寺を訪れ

計画をたてたものが言うのも自画自賛になりますが素晴らしいコース

だと思ひます。

近いうちに要項を皆様に届けます。皆様の参加をお待ちしています。

―特集 例会担当者の声―

## 例会の苦勞は

### 天候しだい

三月例会担当 末森 清司

天候というものは心気を左右する。わが備陽史探訪の会の例会も正に天候次第である。

三月の第三回三原史跡めぐりも天候が一番気になったものだ。何しろ私の例会は必ず登山がつきもの。それまたたっぷり一時間余の歩くコースである。好天なら楽しい山登りだが、雨となると無残である。それだけに当日の天候が一番の苦勞という事になります。

私の例会は必ずバスツアー、果して参加予定者が全員集って下さるだろうか……？ 当日雨が降らず、参加者全員お元氣な姿を拝見した時はほっとして心配事がずっと消えるのです……。

私の例会は一年前位より計画しており、見学コースの決定と下見 見学地の杜寺等の見学交渉、資料を集めたりまとめたり等は私の趣味なので楽しみながらやっています。

下見等は一人で何回もコースを廻りますが、その都度新しい発見をしたり、今迄みえなかった事が解ってきたりして楽しいものです。仲間が居るともっと楽しいのですがお互いが遠方であり都合もありでどうしても単一行動をとります。

唯ひとつ資料作りが思う様に出来ない事、何しろ文才がないので上手に書けない事と、字が下手な事、皆様に果して読めるだろうかとヒヤヒヤしています。私自身下書用に書いた文が読めず何と書いたんだっけと考えてしまう事度々ですので……ハイスマセン。

それより例会実行に対し、資料の印刷、会員受付の応待、バス会社その他の交渉事等、裏方の仕事をしつて下さる会長を始めとして、副会長、役員の方々の苦勞にいつも頭が下り感謝しております。

当日は好天の下、五十余名の多くの参加者が元氣に集って下さり、善根寺の古仏群、龍泉寺の摩崖仏を心ゆく迄拝観、山上での瀬戸内海の景色を観めながらのビールとべんとうは、殊の他うまかった……。

参加された皆様の御協力に感謝しつつ楽しい一日を過した事、うれしい事でした。

都合で参加出来なかった会員の皆様三原の史跡めぐり御希望ございましたら事務局又は私の所へ連絡下さい。お互いの都合を作り、御案内したいと思つてます。(一人でも何人でも可、気軽どうぞ)

最後になりましたがこの秋、十一月例会及び特別例会として私が担当、安芸吉田の毛利公居城跡郡山城跡探策を計画しました。(注11月20日) ぜひ多くの方々の参加をお待ちします。皆々様のお元氣な姿を拝する事を楽しみにしております。

## 例会を振り返って

五月例会担当 武島 種一

歴史を見るにつけて、文献のみにたよるより併せて関係現地を訪ねることがどんなに有意義で、更に分かり易いかを例会に参加するたびに、痛感します。

そうした思ひの背景には、世話をされる会員の熱心さと周到な準備のお陰と思ひます。

ただ、私自身の場合は昭和五十八年三月以来、五回、備北地帯を案内したのでありますが充分な用意もせず、現地の知識もあいまいで、終つて見ては毎回の様に恥しい思ひが残りました。

五月の例会に比婆郡西城町へ久代宮氏の遺跡を案内して感じたことを振り返つて見ますと、福山からの距離の関係で見学箇所が少なかつたことは残念でしたが、道中の山城史に詳しい田口副会長が車中で説明をされたことが、一面では有意義であつたのではないかと思います。現地に於いては西城町郷土史研究会長堤さんのお話で皆さん満足されたことと思ひます。又、浄土寺で通常は拝見できない画像を、三幅も見せて頂いたことは、大きな収穫ではなかつたでしょうか、それにつけて思ひますことは重要な物を見学するとか、説明をして頂く事等を計画する場合は色々と伝手を求めて良い結果が得られるように努めることが大切で、私の郷里の者も画像をどうしても見せて貰えなかつた残念がつていました。私自身、最近奥吉野へ後南朝の遺跡を訪ねた際案内して下さった知人のお陰で、あるお寺の宝物庫で重要文化財を見せて頂き写真撮映までさせて頂きました。

見学の箇所を多くするか重点的にするかは道中の時間の関係がありまゝすので、選定には充分の配慮が必要と思ひます。

備後最大の豪族といわれた宮氏の備北地方における足跡は寺社、山城等私の守備範囲は案内した積りです。

今後は更に勉強して備北における他の史跡を案内したいと思っております。

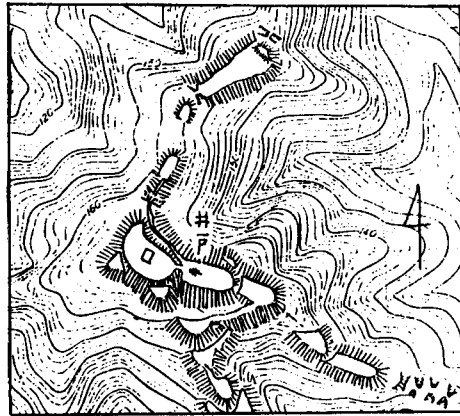
## 備後の山城(一) 棕山城跡

(福山市駅家町服部永谷)

福山駅前から中国バス服部行きに乗って約三十分、服部大池を過ぎる頃左手に三角形をした小高い山が見えてくる。これが棕山城跡である。城跡に行くには、永谷バス停で降りて栄昌寺を目指せば良い、境内左手に登山口がある。城跡は新四国八十八カ所の霊場となっており道はきれいに整備され登りやすい。胸を突くような坂を登り詰めると両端を土塁空堀によって嚴重に防備された平段に到着する、ここはもう城内で東北から侵入する敵に備えた郭(くるわ)跡である。ここから少し登ると本丸に達する。三十メートル四方の平地で山頂に位置し見晴らしが良く、南を望めば低い山並みを隔てて芦田川の流れがキラキラと光っている。城郭の遺構は山頂から南、南西にかけて残り、典型的な戦国山城の面影を伝えている。

城主には桑原一族の名が伝わっているが、福山周辺では、熊野町の一

乗山城跡と共に見学しやすい山城跡の一つで、新四国八十八カ所巡りを兼ねれば、手軽なハイキングコースとなる。  
(田口 義之)



## 福山 萬葉

— 深津島山 —

のむろの木・神島の浦—

加藤 惣一

今の福山から人家や田園など一切を取り払ったら、どうなるであろうか。蔵王の麓まで白波がよせていて、大小様々の島山が点在する、美しい

景色の海であつたであろう。萬葉集で、この景色をもとに詠んだものが、○路の後(しり)・深津島山暫(しま)しくも君が目見ねば苦しかりけり  
(巻第十一、二四〇三)

という恋歌である。この歌は「柿本朝臣人麻呂之歌集出」とされているから、このまま人磨の歌とはしがたいたとしても、飛鳥時代(今から千三百年前)の古い歌であるにちがいない。

また、鞆の浦を詠んだ歌に、巻第七、雑歌・羈旅作・作者未祥の、次の歌がある。

○海人(あま)小船帆かも張れると見るまでに鞆の浦廻(み)に浪立てり見ゆ(一一八二)

○ま幸(さき)くてまた還り見む大夫(ますらを)の手に巻き持たる鞆の浦廻を(一一八三)

美しい景色に心ひかれて、船中から鞆の浦を遠望している風情がうかがわれる。

年月作者を明記してあるのが、巻三にある、次の大伴旅人の絵である。それは、「天平二年(七三〇)庚午冬十二月、大宰師大伴卿上道之時作歌五首」と詞書のある歌のうちの三首で、

○吾妹子が見し鞆の浦のむろの木

(天木香樹)は常世(とこよ)にあれど見し人ぞなき(四四六)

○鞆の浦の磯のむろの木(室木)見むごとに相見し妹は忘れえめやも(四四七)

○磯の上に根はふむろの木(室木)見し人をいづらと問はば語り告げむか(四四八)

この際、旅人が鞆の港に泊った形跡は無く、船の中から磯に根はうむろの太木を見て、亡妻を偲んでいるだけである。

それから六年たった天平八年(七三六)に、新羅の国に使した一行が内海を西下した時作った歌の中にも次のむろの木の歌がある。

○離れ磯(そ)に立てるむろの木うたがたも久しき時を過ぎにけるかも(巻第十五、三六〇〇)

○暫(しま)しくも独りあり得るものにあれや島のむろの木離れてあらむ(巻第十五、三六〇一)

これらの歌によって推察される鞆の浦のむろの木は、島の磯に立っていた一本の太木で、常世を意味する霊木と考えられ、鞆の浦を船で通過する都びとが見上げて、祈願の対象とした有名なものであったと思われる。

以上のどの歌も、鞆の浦を船から

見ているだけで、寄港した様子がない。それでは、何処の港に当時は泊っていたのであろうか。それについては、右の二首の歌の前に、次の歌がある。

○月読みの光を清み神島の磯みの浦  
ゆ船出すわれは(巻第十五、三五九)

即ち、「神島の磯みの浦」を出帆したのである。そして、この「神島の浦」とは、恐らくは、今の芦田川の川口、現在「神島」の地名が残るあたりではあるまいか。その理由の一つに、先述した天平八年の遣新羅使一行の次の歌があげられる。

○朝びらき漕ぎ出て来れば武庫の浦  
の潮干の瀉に鶴(たづ)が声すも(巻第十五、三五九五)

○吾妹子(わぎもこ)が形見に見む  
をいなみづま白波高みよそにかも  
見む(巻第十五、三五九六)

○ぬばたまの夜は明けぬらし多麻の  
浦にあさりするたづ鳴き渡るなり  
(巻第十五、三五九八)

これらの歌の中には一行が船泊りした港の景が詠まれているが、三つとも、武庫川、加古川、高梁川の川口の港である。これに準じて考えれば「神島」を芦田川の川口の港と見ても、不自然とは言えぬのである。

「神島」については、別に巻第十三に作者未詳の長歌三首と反歌六首がある。(三三三五―三三三四)そのうちの四首(三三三九―三三三三)に「備後国神島浜調使首見屍作歌一首并短歌」という詞書があり、船泊りの港であった「神島の浜」も陸路を辿る民衆の側では、行路の人の屍のある悲惨な場所であったことを伺わせる。そういう時代であったのである。

## 棕山城跡

近藤 文三

神辺平野より北方を遠望すれば連嶺が東より続き西北にあり一際高い峰が服部の蛇園山(古くは龍山という)である。その蛇園山の西側を南に降った支嶺に棕山城跡がある。これは水野勝成公が正保二年(一六四五)築いた服部大池より約二キロメートル北上した位置である。

棕山城の築城年次は不詳とされておるが南北朝時代南朝方に与せし従五位下刑部少輔桑原伊賀守重信が城主でその子重久を経て降って天文年中(一五三二―一五五)最も栄えしとある。

貞和五年(一三四九)八月足利左兵

衛督直義謀破れて高武蔵守師直の怒りをうくところとなり遂に兄尊氏の追討を受け両者角遂することとなり偶直義養子直冬備後にありこれを討つため師直の弟高越後守師泰京都より備後に下向するがこれを更らに直義が追うこととなり師泰勢となり併せて播州に本陣を置く將軍陣営に合流すべく帰途につくにいたり服部郷を通過するのであるがこの時熾烈な服部合戦が行われたのであるその戦場がこの棕山城の東側麓の服部川流域であった。

このような歴史的面影を保存し地域文化発展のため目下棕山城跡を福山市史跡指定申請中である。これが指定されましたら地元の計画として次のように考えている。

一、駅家町内観光ルートの一環として服部大池・大坊公園・棕山城跡・蛇園山ハイキングコースとして開発

一、城趾の麓に栄昌寺という真言宗の寺がありこの裏山に信者による八十八ヶ所巡りの御大師が祀られておりこの御大師道を城跡が連道しているこのコースに植樹

(桜)

一、城跡の郭部分一帯が小鳥の巣箱設置等により自然の森を造る

一、広報宣伝に努める(資料等作成配布)

以上のような計画をしておりますので多くの皆様のご協力とご指導を仰いでおります。

## 樹木の魂

佐藤 秀子

浄久寺の鐘楼のそばに、苔むした体を天に聳えさせ、すでに神様になっている榎の木があります。この木はイチイ科の常緑高木で雌雄異株、雌花は二個ずつ短枝にでき、実は、なつめに似て食用、燈火用、材は建築、器具用と辞書にあり、宮氏の用意周到さが、しのばれます。

大きい木は、もちろんのこと、道端に生えている雑木にも、それぞれ風情があつて、春の萌芽、夏の深緑、秋の紅葉、冬の孤高の様、厳然とした樹形等、すべてにわたって魅力的です。

西洋、あるいは東洋でも樹木は根や枝に精霊が宿るとされ、日本でも木の魂についての伝承があります。古代においては樹木も国事の最重要問題について相談をもちかけられ、最初の民族に放浪のみちを指示したりして、とても強い影響力を持っていた。

いました。

アポロンの月桂樹、ゼウスのオーク樹は、それぞれの神殿内にあり民衆や神官は助言を仰いだり、相談をもちかけたりしたと記述にあります。又、トネリコの木は、きわめて長命、その根は、いかなる樹よりも地中深く伸び枝はいかなる樹よりも高く天に伸びる為、世界樹イグドラシルと称されたそうで、どうしても会ってみたい樹です。

昔から自然と一体化して生活してきたわたし達は、現在の四季など眼にもとめない時代にあつては、自分の魂もどこへやら、自然のころなど考えてみることもあまりありません。

大富山城の樺の木は四月に見た時には、開ききつていない若葉が、うす緑の線となつて幾可学的な樹相だったけれど、五月の例会には、萌える新緑が若武者をおもわせ、わたしはあちこち歩き回つて木の肌にふれて、彼らとの対話を楽しみました。

木が言葉話すとすれば、その声は澄んで穏やか。なぜなら彼らは、わたし達のように耳がないので感性で話しますし、いつもは沈黙を守つて、がまんすることに慣れていますから、話をするとなれば、人間の

ようにすべてを明からさまには話さず、言葉少なに、内に秘めたことをわたし達に想像させようと謙虚なのです。もし、人間が話すことができず、筆談と眼だけでしか相手との意志疎通をはかれないとすれば、けんかや憎みあひは起らないような気がして、話せるということが、わたし達にとって、いかに傲慢さを増長させているか考えさせられます。

先日、佐賀田城へ行つた時には、恋するような木には、めぐり会えませんでした。その石垣の見事さ、山頂へ石を運びあげるのに要した人夫等の労力は大変なものだと思ひました。これが城主の権力を表わしているという説明を聞いて、近在に無数にある山城の跡にも、それぞれの武将のおもひが残っているに違いないと、しばし、昔に想いをはせて（曇天ではあつたけれど）深呼吸して、漂っている彼らのひそやかな息づかいを心にとどめました。

帰途、あれが神辺城と教えてもらった山頂に一本、大きい木が見えました。「あの木は神辺城ができた頃に植えられたのかもしれないね、ずいぶん大きいから。」何の木でしょうね。嬉しいな、又、楽しみができました。いつか神辺城跡へ出かけて

ゆっくり対面させてもらいましょう。

山城跡に出かけてみても建物の遺構は残っていませんし、空堀や土塁、郭等は山の一部分になつてしまひお城であつたことをやめて眠りにつこうとしています。けれど木や岩は、城の中の見聞き役として、すべての時を永らえてきました。何十年かたつて又、山城を訪れた時、以前にも増してゆつたりと大人びた彼らを見て再び、幸せな気持ちに浸らせてもらえらることでしよう。木の芽ばえ時の春、山々には木の霊気が満ち溢れると、本で読んだことがあります。彼らの生を妨げないように遺跡や自然を守つてゆきたいものです。

## 「私の郷土史入門」

早船 薫

「時は歩み月は走り年は飛ぶ。」遠い昔何かの本で読んだこんな言葉が実感として身に迫ってくる今日この頃である。

永年住み馳れた横浜から日本鋼管の福山進出と共に福山駅頭になつてから早くも二十有余年の歳月を数えるに致つた。駅頭に降り立つた小さな一族がローカル色の濃い町並を越えて連なる山波に一入の旅情に侵

りきつたことを今更のように想い出される。

福山に赴任してくる前に備後地方の方言を勉強して来たとは言え、馳れる迄には四、五年の歳月を要し、言葉の意味を履き違えてトラブルに巻き込まれた事もあつた。今では言葉の不便は殆ど感じられず、むしろ方言が懐しくさえ思える昨今である。子供達もそれぞれ福山の地に世帯を持つようになると私共もいよいよ備後の地に骨を埋める覚悟が出来たようである。

備後の土になるからには先づ備後の歴史や先人達の生活を知りたい。私共は福山や備後の郷土史の本を漁り福山城の史料図書館に足を運ぶようになり、夫婦そろつて備後一帯の史跡操業を始めたのが郷土史入門の一步であつた。行く先々で土地の古老を尋ねて耳で聞くふれあひの歴史の中から備後人・仲間入りが一歩一歩出来てきたように思われる。

一昨年備陽史探訪の会の存在を知り郷土史研究の人々の仲間入りさせて貰ひ今日に及んでいる。各研究部会のコーディネーターにより備後の古代、中世、近世に至る歴史を横断的に学びとると共に、実際に遺跡現地を探訪することにより、且つて学生

時代に学んだ日本歴史が裏付のある郷土史とラップさせることにより現実味のある歴史として、改めて先人の生きざまを実感として心に刻み込まれる思いである。

備後の歴史を未だ断片的にしか学び得てない状態の中で備後の歴史を云々することは痴がましいことであるが、備後の歴史の中で東国と備後の人々との交流がいかに多いかを知り、その経緯の如何を問わず備後の人々との血の交りを感じ非常に近親感を抱いた事は事実である。

然し備後の歴史を深めるに従っていろいろの疑問が生じてきたのも事実である。中世以降の歴史の背景や瀬戸内海風土の中で備後特有の気風が育つのは当然であるが轡を中心とした東西文化の交流点の位置にある備後は他の地方のどこよりも歴史文化や遺跡の多い地であると共に文化度の高い地域でもあった筈であるが備後の歴史にあまり関心を持たない人が多いように感じられる事である。

昨今郷土史を見直す気運が昂りつつあることは大変喜ばしいことであるが、各地域毎に断片的活動に任ざれている例が多いのも残念な気がしてならない。備後地域を網羅した歴史研究活動こそ必要であり横断的な

風土記の刊行が望まれる。多くのの人々に備後の歴史に対する関心と誇りを昂める手立となりはしないだろうか。

## 絵馬あれこれ

熊谷 操子

我が国では昔、神霊は乗馬姿で人界に降臨するものと信じ、馬を極めて神聖視していたという。以来神事や祈願には馬を神霊に捧げるようになり、例えば降雨祈願には黒毛の馬、止雨祈願には白毛の馬を社に献じた事もあったとか。献馬の習俗は現在まで伝承されているが、一方では生き馬に代って馬形を献上する風習も生まれ、生き馬を献上出来ぬ者、馬形をも造れぬ者が馬の絵を献上した。人にも言えない悩みや、人事を尽してもぬぐえぬ苦しみや願いを絵馬に求め、開運や息災だったことの感謝の気持ちを絵馬に託し、これを奉納するのが本来の絵馬の姿であると思う。

江戸時代、利根川筋の貧困な農村の主婦が心を鬼にして、生まれたばかりの子供を殺す十ヶ月の日が満ちてやっと生んだ自分の子がどうして憎い筈があるうか。苦しく悲しい女性の気持が痛い程身にしみる。こうま

でしなければ家族が食べてゆけなかった当時の農民の暮らしが思いやられる。こうした非人道的な行為を戒めると共に、その水子の霊を弔うために奉納されたのが「子がえしの絵馬」である。求めればすぐそこにある避妊具の中で、現在の女性性は、なんとしあわせなことか。

「牛の絵馬」には、桐生足利地方の機織工女の哀れな願いがこめられている。白い双手を開いたもの。片手のもの。指。機の梭を二つ描いたもの等、殆んどが手でその数はおびただしい。機織の技が速く上達するように、手や腕の病気が治るようにと祈願したものらしい。江戸中期より明治にかけて、越後。越中。能登。加賀。武蔵。相模。上総。下総。甲斐等の貧者の娘を人身売買にも等しい方法で桂庵（人買い）が年季奉公に機屋に世話する。身売り金の半分を桂庵と世話人が取り、あと半分が親の手に渡る。娘達はそんなやりとりは知らず、あとで機屋の主人からそれを聞かされる。彼女達が機を織りながら唄った機織唄は、酷使に耐えながら年季明けをひたすら待ち続ける恨みと望郷の唄であった。食事は麦飯と汁だけで、毎日未明より夜は十時、十一時まで働かされ、休

日は月の紋日一日だけで、それも半日又は夕方まで働かされる事は珍しくなかったという。白の絹地が汚れるからと言って、真冬でも火の無い所で織らされたとか。あまりの酷使に耐えかねて、三四人組んで逃げ出してはみるものの、すぐに見つかって連れ戻される。自殺する娘も多々あったという。頼る者として無い彼女達が最後に頼るものは、やはり絵馬しかなかったのだらうと思う。十二三才から二十才位までのいたいけな娘の悲しみや、はけ口の無い怒りをこれらの絵馬が無言で語っているように思え、私は思わず涙ぐんでしまった。

板子一枚下は地獄といわれた江戸時代の船乗り稼業は命がけですさまじい。難船。破船を避け、たとえそれに遭遇しても、命だけは助かりたいと願わずにはいられない。その切ない願いを「船絵馬」に託すのである。弱点の沢山ある和船で、鎖国下の渡海方法は大変むづかかったと思う。当時の和磁石は目盛も荒く、動揺によって針が踊って見誤る事もあったという。漂流中の慣習として番を切る、帆柱を切り倒す。勿荷。碇を綱でたらず命が助かった越前小浜の住吉丸の乗務員が、嘉永二年に

深浦の円覚寺に奉納した船絵馬には  
チョン切った鬚がついている。

昭和三十二年から三十五年にかけて、当麻寺の曼荼羅堂が解体修理された時、その天井裏から鎌倉時代の小さい絵馬が数枚発見された。戯画風の単純な馬が描かれているとか。これを聞いてすぐ当麻寺へ飛んで行ったけれど既に博物館に治められた後だった。

絵馬に、馬だけでなく他の絵も描くようになったのは室町頃からだという。先日白瀧山で観た磨崖仏。あの異国風の表情に疑問の矢を放つ河合寺（河内長野市）の天部像にどこか似ているし、加西市の五百羅漢の表情に似た点もある。ともあれ、これは極めて芸術性の高い一種の絵馬であると私は信じた。小早川氏が瀬戸内の島々を睥睨し戦勝を祈願するために、仏師上がりの石工に彫らせたものか、山岳修験道の行者が彫らせたものか。又は近世のものか。年代がはっきりしないのも有難い。私めの貧しい想像も許されるから。絵馬を通して透かしてみよう。

## 三原史跡巡り感想文

後藤 匡史

三月六日、今年第十一回の例会はいつもの様に三原の史跡を末森氏が担当した。定員いっぱいバスは一路三原へ、平安時代創建と伝えられる善根寺は、県重文の仏像群を収納庫に集め寺はない。

それから沼田小早川氏の市場跡を通り抜け、龍泉寺へ、この寺は室町時代、小泉小早川氏の氏寺である。

白滝山ハイキングコースをポカポカ陽気の中徒歩にて小一時間、展望が広がる中、瀬戸の島々がパノラマの様に広がり、あれが大三島そして生口島と指差しながら、ふとNHKテレビの、ひょっこり瓢箪島のモデルになったあの瓢箪島である。

民話伝説によると遠い神世の時代、伊予神（愛媛県）と備後神（広島県）が境界を競っていた。そしてその境を決める為、伊予神は大三島に備後神は三原筆影山（四四五M）にてその間に綱を張り引つ張りあったが仲々決着がつかず、くたびれた二人の神は、ふと下を見ると小さなひょうたんに似た島があり、これを境にしようと話がつき今も広島県と愛媛県

の境である。

話は横道にそれたが山の頂上方位岩（別名八畳岩）あり、ここで弁当を食べたが近くにいた人を持っていたコーヒーやお茶を振るまったが考えて見ると自分の口に入ったのはなかった。アー無情!!

そこから下山した後、上野城跡へ、ここは小泉小早川氏の居城跡である。小高い丘の上は本丸とわかる程度の平地であった。

それから帰りに時間が早かったので糸崎神社へ参拝したが中の建物の一部に三原城関係の建物があり興味深かった。

一句 伊予備後

中をとりもつ瓢箪島

## 田尻・鞆 歴史民俗資料館を訪ねて

歴史研・種本 実

七月十日（日）五人のメンバーで田尻と鞆の歴史民俗資料館を訪ねました。田尻では田尻民俗資料保存会会長の来山敏夫先生に、館内と岩風呂跡、王が峰古墳、鞆鉄道跡等々を大変詳細にご説明していただき参加者一同大変深く学ぶことができました。

「岩風呂」は水野勝成が晩年療養の為に海水を沸して入浴したもので岩に柱の跡が残っていました。近くには参勤交代の時利用した船の船止め跡もありました。「王が峰古墳」

は二基の横穴式石室が半ばくずれていました。大正時代地元出身の浜本鶴寶先生が発掘された頃は出土品も少しは保存されていましたが今では行方不明とのことで残念に思います。古墳は他にも数基発見されているようです。「鞆鉄道跡」では踏切り跡、田尻駅跡、線路跡など案内していただきました。鞆の資料館については割合させていただきます。

歴史研では鞆鉄道の軌跡を年内にまとめる予定で聞きとり調査を主にを行っています。

会員の皆様の御協力をお願いします。

講演会——歴史民俗研究部会主催

「暮しの中の神事」

・会費 一般四百円

会員二百円

・講師 三蔵稻荷神社

石川紘彦氏

・日時 8月7日(日)14時—16時

・場所 福山市中央公民館

## 活動日誌

(昭和六十三年度上半期)

## 城郭研究部会

一月一六日(日) 歴史講演会 於月見  
櫓 「地毘庄と山内首藤氏」  
出内博都 「官親忠書状に就いて」田口義之 参加二十四名  
終了後同所にて新年会(参加四名)

二月一八日(金) 第一三回中世を読む  
会 於中央公民館 参加六名

三月一八日(金) 第一四回中世を読む  
会 参加六名

四月一五日(金) 第一五回中世を読む  
会 参加六名

五月一九日(休) 第一六回中世を読む  
会 参加六名

六月一七日(金) 第一七回中世を読む  
会 参加七名

六月二十六日(日) 相方城見学 参加  
六名

七月一五日(金) 第一八回中世を読む  
会 参加九名

## 参加者募集

## 第一九回中世を読む会

時 八月一九日(金) 午後七時一十九時  
場所 中央公民館(福山市花園町)  
テーマ 「山内首藤家文書を読む」

会費 無料(但し、初めての人はテキスト代が必要です。)

## 山城に興味のある人集まれ

城郭研究部会の主な活動は、南北朝から戦国時代にかけての山城跡の調査研究です。十一月頃から調査ゾーンに入ります。参加希望者は早めに連絡してください。

城郭研究部会、中世を読む会に対するお問い合わせは左記まで

〒720 福山市多治米町5-19-18  
田口義之方

☎(0849) 5316157

## 八月例会のお知らせ

## スライド上映会

## 「中国の古都を訪ねて」

講師 堤 勝義

時 八月三十一日(日) 午後二時一四時  
場所 中央公民館

会費 無料(非会員百円)

※終了後懇親会を行います。

## 今後の行事予定

九月二十五日(日) 午後二時一四時

歴史公演会「戦国大名宇喜多氏について」

講師 立石定夫氏

十月九日、十日 近江路一泊旅行

十月三十日(日) バスツアー例会

「備前宇喜多氏を訪ねて」

城郭部会担当

十一月二十日(日) バスツアー例会

「吉田郡山城を訪ねて」末森清

司担当

## 備陽史探訪の会財産目録

(消耗品、現金、及び500円未満の物は除く)  
平板測量具一式 ハンドマイク(小) 1  
七森義人保管 巻尺(500cm) 1  
内訳 平板 画板 1  
アリダード 1 ラジカセ(マイク付) 1  
レベル 2 ホッチキス(大) 1  
三脚 1 小靴七森義人保管 1  
ポール 1 山城志第9集 1  
箱尺 1 (単価800円) 41  
ロッドリング 1 以上 7月15日現在  
ハンドマイク(大) 1

## 事務局日誌

三月六日 三月例会「三原史跡巡

り」担当末森清司、会計佐藤秀子、参加五四名

三月十一日 役員会(於ホーセン)

会則、総会報告、会計、行事計画に就いて討議。一〇名出席

四月一日 役員会(於中央公民館)

総会報告、親子古墳巡りに就いて討議。一〇名出席

四月一〇日 親子古墳巡りの下見。

津之郷、赤坂町周辺。篠原・山口・田口・七森・佐藤参加

四月一七日 役員会(於中央公民館)

古墳巡りのパンフレット製本、

会報委員井上氏多忙の為、事務

局長代行承認。七名出席

四月二十一日 西城例会下見。武島

田口・佐藤・佐藤参加

四月三〇日 役員会(於中央公民館)

古墳巡り最終打ち合わせ、九名

出席

五月五日 第六回親子古墳巡り。

担当古墳部会、会計佐藤洋一

参加一〇三名

五月一五日 五月例会「備北の宮氏

を訪ねて」担当武島種一、会

計佐藤秀子、参加四十七名

五月二五日 六月例会の案内発送

六月一二日 「井原史跡巡り」

担当後藤匡史 会計七森義人

参加四八名

六月二三日 役員会(於中央公民館)

六三年度一泊旅行、八月例会

(スライド上映会)、一一月例

会(末森清司担当)、歴研よ

りの要望(講師謝礼、八月七日

講演会)等に就いて討議。

八名出席

※会に対するご意見、ご要望、御問い合  
わせは

福山市多治米町5-19-18

☎(0849) 5316157

田口義之方

備陽史探訪の会事務局